

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

20世紀前半における“トナカイチュクチ”とアメリカ人との毛皮交易：
シベリア北東部のチャウン地区の事例

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池谷, 和信 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001986

20世紀前半における“トナカイチュクチ”とアメリカ人との毛皮交易 シベリア北東部のチャウン地区の事例

池谷 和信

国立民族学博物館民族社会研究部

- | | 事例 |
|--|--|
| 1 はじめに | |
| 2 調査地の概観 | |
| 3 帝政ロシア時代のチュクチの交易 | 4.1 チャウン地区の概観と「チャウン集団」, 「アナディール川上流集団」 |
| 3.1 1900年頃の“トナカイチュクチ”の地域集団 | 4.2 20世紀前半におけるアメリカ人とチュクチとの交易の実態 |
| 3.2 交易の実態 | |
| 4 ソビエト社会主義時代(20世紀前半)のチュクチの毛皮交易—チャウン地区の | 5 考察—20世紀前半におけるチュコトカ・カムチャッカ地域の先住民と毛皮交易 |

1 はじめに

毛皮はかつて“柔らかな宝石”と呼ばれ、西ヨーロッパや中国において上流階級のステータス・シンボルを示していた。筆者は、すでに世界システム論の視点から、世界の毛皮をめぐる中核と周辺の変化の動態を把握する枠組みを提示し、アフリカのカラハリ砂漠における毛皮交易の盛衰を通して狩猟民の社会変化を把握した(池谷 1999a)。その結果、16世紀以降の毛皮交易史をみていくと、次のような3点が明らかになった。第1は、世界には西ヨーロッパ、中国¹⁾、日本、北アメリカという4つの中核が存在してきたこと、第2は北アメリカ、シベリア、中国東北部に加えて南部アフリカにおいても毛皮交易の発達が見られたこと、第3は1930年頃にはアフリカのサンやピグミー、北米のイヌイット、中国東北部のオロチョンなどのように、世界の周辺に暮らしていた人々が、共通に世界経済システムの周辺に組み込まれていたことである(池谷 1999a)。しかし、本稿で述べるような狩猟や漁撈を組み入れたトナカイ遊牧民社会²⁾が、どのように毛皮交易に関与していたのかに関しては、事例研究があまりないのが現状である。

さて本稿で対象とするチュクチは、ロシア共和国の北東部のチュコトカ半島に暮らす先住民として知られている。彼らは、19世紀後期の主な生業様式を指標として、トナカイ牧畜を生業の中心とする“トナカイチュクチ”とセイウチやアザラシ漁を生業の中心とする“海岸(海獣)チュクチ”に2分されていた(Schweitzer 1999)。この報告では、“トナカイチュクチ”に焦点を置き、20世紀前半におけるチュクチの交易の実態と、それによってチュクチ社会がいかなる変化をしたのかを把握することを目的とする。

ここで、チュクチの生活史のなかで20世紀前半に焦点をおくのは、現在の古老からの現地調査から“トナカイチュクチ”の社会史を復元できる時代の限界であると考えられるからである。筆者は、世界の毛皮交易と地域社会との関係を扱う研究は、世界的に毛皮の流通が世界の周辺にまで浸透していた点や現存している人々から聞き取り調査が可能である点から、1930年代における毛皮交易の実態とその社会変化の復元に焦点を置くことで実りの多い成果が上げられるものと考えている（池谷 1999a: 215）。この報告では、この視点をチュクチの事例に適用するものである。

すでに1898～1948年におけるベーリング海峡をめぐるアメリカ人とチュクチやエスキモーなどの先住民との取引に関しては、P. シュヴァイツァーとE. ゴロフコの報告が知られている（Schweitzer and Golovko 1995）。彼らは、世界システム論の視点から、プロビデニア（Provideniya）、ラヴレンティア（Lavrentiya）、ロリノ（Lorino）、ウエレン（Uelen）などのアラスカに最も近いチュコトカ半島の海岸部の村に焦点をおいて、そこでの古老からの聞き取り調査をおこなっている。その結果、1930年代や1940年代における交易の実態やそこでの交易品の一覧や交易の特徴を明らかにしている。しかし、本稿の調査地のようなアラスカ半島から最も遠い、北極海に面するチュコトカ西北部においてアメリカ人との交易が実施されていたのか否か、そこでの“トナカイチュクチ”の交易の実態に関しては明らかにされていない。

筆者は、チュクチの人々を対象にして、ロシア連邦チュコトカ自治管区チャウン地区レトクーチ村（Rytkuchi）において、1997年10月～11月の30日間、2000年1月～2月の25日間にわたり実地調査を実施した。とりわけ過去を復元するための古老への聞き取り調査は、この村に滞在している人々のほかに、この村の出身でペヴェック市の病院で入院している女性の所にも行った。現時点では、村からトナカイ飼育が行われるツンドラへのアクセスが困難であるために、トナカイキャンプに滞在する古老への調査を一部しか実施していない。また、筆者は、現地に残存していて当時使われていたという交易品の計測と写真撮影を実施した。

2 調査地の概観

1989年のチュクチの人口は、約15000人を示す（池谷 1999a）。現在の彼らは、ロシア政府による集住化や近代化政策が進められてきた結果、村での定住生活を送るか政府に雇用されて国営農場（ソフホーズ）内でトナカイ飼育や漁獵に従事するかに分かれている。しかし現在、ソビエトの社会主義体制が崩壊したために、ソフホーズが解体して彼らの生存が脅かされている状態にある。

かつて17世紀のチュクチは、チュコトカ半島とコリマ川の下流域に分かれて居住しており、本稿の調査地であるチャウン湾沿いやアナディール川上流域には居住していなかつ

た(池谷 2002)。そこには、狩猟採集民ユカギールが占拠していたといわれる。その後、チュクチはトナカイ狩猟などを生業の中心にしていた狩猟民から、家畜トナカイの飼養を生活の中心とする遊牧民に変化していく。これにともない、“海岸チュクチ”と“トナカイチュクチ”という2分法が彼らのあいだで一般的になっていく。その後1900年頃になって、ロシアの民族学者ボゴラスによって、本稿が対象とするチャウンスキー地区に居住していた、後述するような「チャウン集団」や「アナディール上流集団」の生活の実態が初めて明らかにされた。

さて、アメリカの文化人類学者パーチは、1775年～1900年における北太平洋の交易システムを整理して、この地域の交易の実態を4つの類型に分けている(Burch 1988)。第1は、“トナカイチュクチ”と“海岸チュクチ”との関係に見られるようにチュクチ内のものである。これには、トナカイの毛皮と海獣類のオイルが交換されたと記されている。第2は、ベーリング海峡をはさんで“海岸チュクチ”とエスキモーにみられる先住民間のものである。第3は、後述する1788年に開設されたアニューイ(Anyui)の交易所にみられるようなチュクチとロシア人との関係がある。第4は、1850年代から1900年代までのあいだにチュクチやアラスカ・エスキモーとアメリカからの捕鯨船員との間にみられたものである。ここでは、セイウチの牙やクジラのひげとアルコール、銃、弾薬、ナイフ、斧などが交換された。そして、これらのものは、先住民の交易人によって東西に運搬されたといわれる。

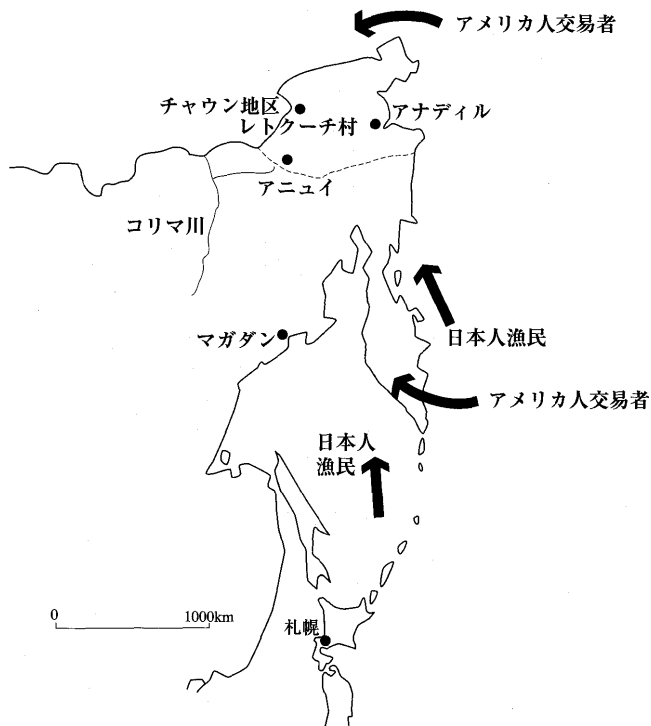


図1 20世紀前半におけるアメリカ人・日本人と地域社会

筆者は、確かにこの4類型によってチュクチの交易形態をある程度説明できるとみている一方で、これによってアニユイの交易所が過度に強調されることには問題があり、アニユイの交易所がチュクチ社会にいかなるインパクトを与えたのかを実証的に研究することが必要であると考えている。

本稿の調査地は、シベリア北東部で北極海につづくチャウン湾に面するチャウン地区のレトクーチ村(図1)である。この村の人口は、1997年現在、493人を示し、このうちチュクチは323人で全人口の約65%を占め、その他はロシア人、ウクライナ人などから構成される(池谷 1999: 6)。この村は、次節で述べるような「チャウン集団」や「アナディール川上流集団」に属していたと思われる人々が集住化して形成されたものである。

3 帝政ロシア時代のチュクチの交易

3.1 1900年頃の“トナカイチュクチ”の地域集団

1900年頃になって、ボゴラスは、チュクチの生活の全体像をはじめて明らかにした。ここで、筆者はボゴラスの調査結果を引用することで(Bogoras 1904-09: 26-27)、1900年頃の“トナカイチュクチ”の地域集団を地図上におとしてみた(図2)。当時、“海岸チュクチ”の人口は、太平洋岸に1100人、北極海岸に1600人の合計で2700人、“トナカイチュクチ”のそれは約1万人を示していた。つまり、チュクチ全体の4分の3が“トナカイチュクチ”で、4分の1が“海岸チュクチ”から構成されていた(Bogoras 1904-09: 32)。この頃、毎年、多くの家族が海岸から内陸に移りトナカイ飼育者に変わっているので、“海岸チュクチ”の数が減少しているという。以下、ボゴラスが報告している各地域集団ごとの特徴

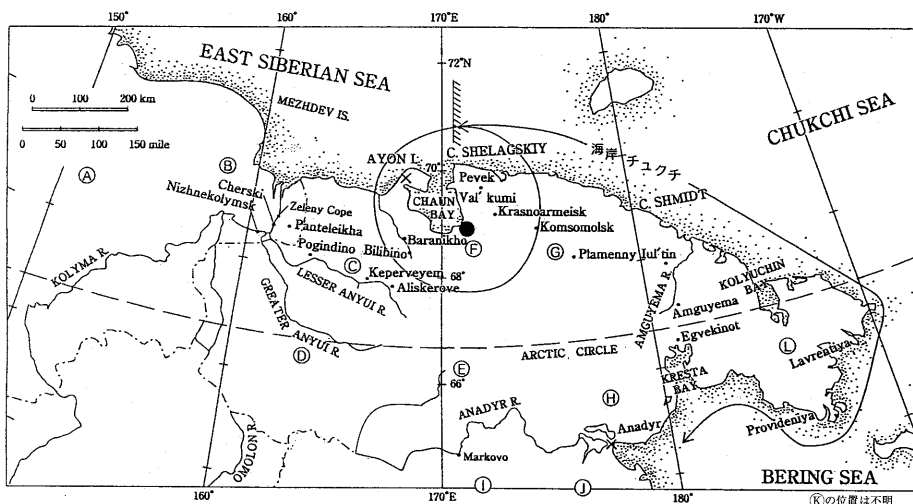


図2 1900年頃のチュクチの地域集団の分布
A~Lの記号は、本文中と一致する。

を記述する (Bogoras 1904-09: 26-27)。

A) 「インディギルカとアラゼヤ集団」は、チュクチの居住域のなかで最も西側に当たり、同じ名前の川沿いに居住する。この地域は、ヤクートとツングース系の人々が居住する地区に囲まれている。ここでは、13のキャンプにおよそ150人が居住し、トナカイの全頭数は5000頭に及ぶ。トナカイの所有者は、スレードネコリムスク (Sredne-Kolymsk) というロシア人の町と他の集落へ肉を供給する。

B) 「西コリマ集団」は、コリマ川の西側のツンドラに住む。ここには、35のキャンプに400人が居住する。この集団は、1884年の天然痘によって、人口の3分の1は死亡したといわれる。また、多くのトナカイが野生トナカイの群に加わったことで、トナカイ頭数の大幅な減少がみられた。

C) 「ドライアニユイ集団」は、チュクチのなかで最も大きい規模の集団で、北極海とドライアニユイ川の間に住居して、キャンプはコリマ川の右岸からアニユイ川に沿って、5～10マイルの間隔で立地する。キャンプの数は、およそ100を示す。トナカイの群はあまり大きくなく、2家族に肉や服や毛皮を供給するのに足りる300～400頭からなるのが普通である。しかし、いくつかのトナカイ群は、2000～3000頭を示す。

D) 「ラージアニユイ集団」は、20のキャンプからなり、その数は、オロイ川とオモロシ川などの南側への移動によって、かなり減少した。スレードネコリムスクとギジギンスクという2つのロシア人の町に肉を供給する。彼らは、海への接近がないので、夏には山中に住む。

E) 「アナディール川上流集団」は、30のキャンプからなる。夏には、山中へ行くことになっている。

F) 「チャウン集団」は、チャウン湾に近接するツンドラに住居する。ここは、約50のキャンプからなる。山地でアニユイ集団と分かれている。東アニユイの人々と似ていて、さらに大きな群があるが、彼らの群の頭数は、400～500頭である。

G) 「エリ集団」は、チャウン集団の東側に位置して、40～50からのキャンプからなる。

H) 「オンミリン集団」は、アナディール川の北岸とホリークロス湾の間に住む。ここは、約60のキャンプからなり、多くの人々はたいへん貧しい。ここには、過去30年間に、“海岸チュクチ”からトナカイ飼育者になった太平洋側の村を含む。

I) 「テルカップ集団」は、約50のキャンプからなる。トナカイ群は、400～500頭で平均的な大きさを示す。彼らは、かつてコリヤークと戦った戦争におけるリーダーである。

J) 「ウツェニセン集団」は、アナディールの南側で、コリヤークとの境界沿いに居住している。トナカイ群は、夏に山の中に移る。

K) 「ホワイト川集団」は、約25のキャンプからなる。

L) 「チュコトカ半島集団」は、チュコトカ半島に住居する。ここには、80～100のキャンプがあるが、気候の厳しさや放牧地の不足からトナカイ群は大きくない。このキャン

プの半分は、海洋から食糧を入手し、犬のチームや毛皮のボートを所有する。

以上のようなチュクチにおける12の地域集団の特徴をみると、“トナカイチュクチ”のなかに、キャンプ成員の規模の大小やトナカイ飼養頭数の大小などから明確な地域性が存在することがうかがえる。なかでも、チュコトカ半島のチュクチでは、トナカイ牧畜と海獣狩猟と漁撈とを組み合わせている点が特徴的になっている。また、この時代を通して、“トナカイチュクチ”であれ“海岸チュクチ”であれ、チュクチの経済活動のなかで交易活動が重要である集団がみられる。

3.2 交易の実態

前節で述べたように1788年には、ロシア人によって最初のロシア・チュクチ交易所が、コリマ川沿いに設立された。この市場には、“トナカイチュクチ”だけではなく、海岸チュクチやエスキモーもやってきた。これは、アニュイ (Anyui) の交易所と呼ばれる (写真1)³⁾。

ここでは、多くのチュクチとエヴェンの人々が毎年春の交易所に集まってくる。ここには、ロシア人の交易人が、タバコ、ナイフ、銅製のヤカンなどと、シベリアキツネ、トナカイの皮、アラスカ製の毛皮、セイウチの牙などと交換をしていた。これらの物は、チュクチの交易人がベーリング海峡に住むエスキモーから入手したものである。当時、約18kgのタバコが、10枚の赤キツネの毛皮、あるいは40個のセイウチの牙と同じ価値があった

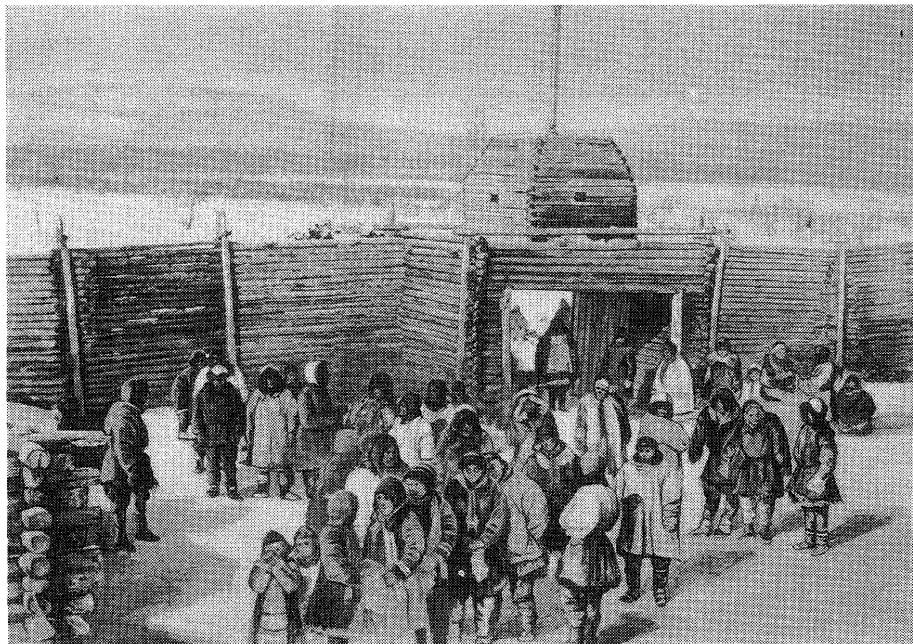


写真1 アニュイの交易所の外観 (Bogoras 1904-09)

という。この他にも、約18kgの鉄製ヤカンが、10枚の赤キツネに匹敵していたという。また、1枚の黒キツネの毛皮は20枚の赤キツネの毛皮に、1枚の銀キツネは2枚の赤キツネに、1枚のビーヴァーやカワウソの毛皮は2枚の赤キツネに、4枚の北極キツネは1枚の赤キツネに相当していたといわれる (Bogoras 1904-09)。このように赤キツネが、交換比率の基準になっていることが注目される。この点では、後述するようにチャウン地区の多くはツンドラ植生であるために赤キツネを捕獲することは少なく、ホッキョクキツネの捕獲が一般的であった可能性はある。

その後、この交易による収益の増大によってか否かは不明であるが、チュクチの飼養するトナカイ頭数が増加したことに伴い、1800年～1820年には、“トナカイチュクチ”が自らのトナカイ群の大きさを拡大して、自らの居住地を西側や南側へと広げていった。その当時の1812年には、Gelairgin (“Marmot”) と呼ばれるチャウンチュクチのチーフ (Chau Chukchee Chief) がいたといわれる (Bogoras 1904-09: 706)。その後、トナカイの大規模所有者として Yatirgin や Amrawkurgin などの名前が知られている。

1860年代には、チュクチの居住域がコリマ川を越えている。そして、いくつかの集団は、コリマとアラゼヤ (Alazeya) のあいだのツンドラに広がった。また他の集団は、ドライアニューイ川 (Dry Anui) からラージアニューイ川 (Large Anui) 方面へ行った。太平洋側でも彼らの居住域の拡大はみられ、多くのチュクチがコリヤークに同化していったといわれる (Bogoras 1904-09: 15-16)。

その一方で、1820年代におけるウランゲルの探険記のなかで、チュクチの交易のようすが記述される。チュクチの人々は、その島と川の土手にキャンプしていた。彼らはベーリング海を渡って、アメリカ北西海岸まで行き、その住人から獲得した毛皮とセイウチの牙を、トナカイぞりに乗って持って帰ってくる。その旅行には5～6ヶ月かかっている。彼らはそこに8～10日間滞在してからもどる。こうしたアメリカ人との交易は、ロシア人にとってもチュクチにとっても利益があった。その後1850年代には、チュコトカ半島の近海にアメリカの捕鯨団が出現するようになり、船員たちが海獣猟をするほかに、“海岸チュクチ”やエスキモーとも交易をした。“海岸チュクチ”のなかには交易の仲介を専門にするものも現れて、北アメリカとチュコトカ半島を往復することで交易に従事していた (Levin and Potapov 1964)。

さらに1878年8月に、ノルデンスキョルドのヴェガ号が、本国スウェーデンから北極海沿いの海岸を通過して、イーストケープを横切り、チュクチの海岸に着いた。ここでは、チュクチの村が海岸沿いにあること、彼らの食物は魚類とアザラシからなることを報告している。そして、夏期には木や骨を骨組みにして、その上をセイウチの皮で張る皮船で漁をしていた。また、ある時には冬期にベーリング海峡を横切り、アメリカ大陸に商品をもって商売をする。さらに、“トナカイチュクチ”は、内陸部に居住していて、彼らの生活は豊かであったという (Nordenskiöld 1881a; 1881b)。

以上のことから、交易に関する記録が残されている地域はアニユイ交易所を除いて海岸部に限定されていること、交易所が開設されたあと10年たらずで“トナカイチュクチ”の居住域が拡大している点は、毛皮交易による収益、トナカイ飼養頭数の増大、放牧地の拡大というような組み合わせが想定でき、遊牧民の牧畜活動と狩猟活動とのあいだに相互関係がみられることを示唆している。

4 ソビエト社会主義時代（20世紀前半）のチュクチの毛皮交易 —チャウン地区の事例

すでに1930年代のアメリカ人とチュクチとの交易については、アラスカ半島に最も近いチュコトカ半島の東部での実態が知られている（写真2）。これは、1930年代につくられたセイウチの牙への彫刻である。そこから、チュクチが、トナカイの群から投げ縄を使ってトナカイをとらえて、その胴体と銃とを交換しているのがうかがえる。アメリカ人は、船を使って訪問している。ここからは、チュクチ側がアメリカ人にトナカイを提供しているのみで、北極キツネの毛皮が使われていたのか否かは不明である。また、描かれているチュクチが、トナカイを所有する“海岸チュクチ”であるのか、あるいはアメリカ人と直接に交易する“トナカイチュクチ”であるのかは不明な点である。

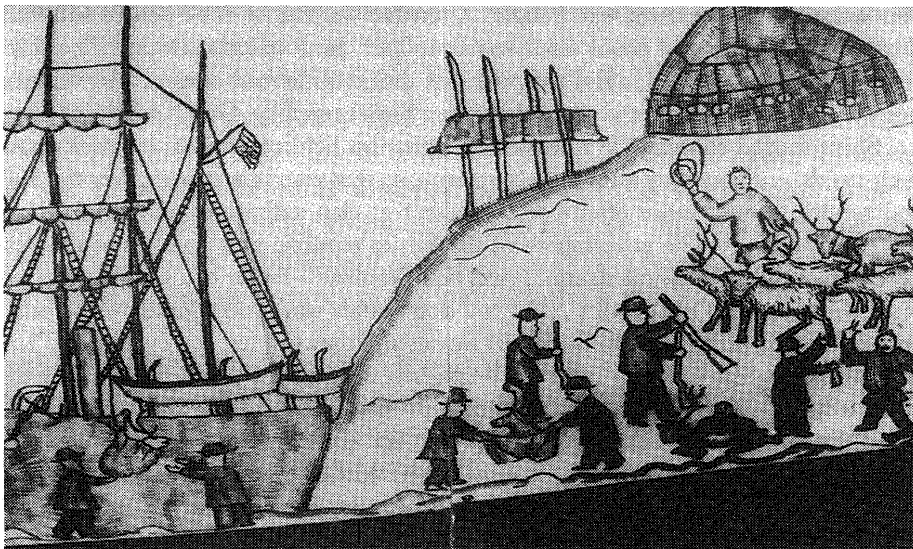


写真2 アメリカ人とチュクチとの交易のようす（Forsyth 1992: 265）

4.1 チャウン地区の概観と「チャウン集団」, 「アナディール川上流集団」

1917年のロシア革命をへて、帝政ロシアは解体されてソヴィエト社会主義連邦が成立した。その後1930年代にはいると、スターリンのもとで国内の辺境地においても社会主義

化が進んでいった。具体的には、居住地の定住化、生産手段の共有化や集団化である。たとえば、1930年代に、アムール川支流のビキン川流域に暮らすウデへでは、各地に新たな集落が形成されコルホーズが設置されたという。しかし、これらの集団化のあり方は、国内で地域性がみられた（佐々木 1997: 14）。

本稿で対象とするチュクチは、社会主義化の浸透が最も遅れた地域の一つで生活している。1933年に、“トナカイチュクチ”の中でつくられた集団農場の割合は“海岸チュクチ”の60%に対して、全人口の3%にすぎなかった。その後、1939年には、“海岸チュクチ”の95%が、ソヴィエト集団化に組み込まれていったのに対して、“トナカイチュクチ”のそれは11%に増加したにすぎなかった。1941年には、チュクチの土地でのトナカイの90%は、個人所有であった。つまり、“トナカイチュクチ”の大多数は、集団化システムの外側において、ロシア人によって提供された現代文明の利益に背を向け、伝統的な遊牧生活に固執していたのである。“ヴェニカノ”のようなトナカイ王は、1930年代に5万頭のトナカイを持ち、多数の貧しい牧夫を雇っていたという。アナディール盆地から北部のツンドラに当たる、チャウン湾とアムグエマ川の間へ移動した“トナカイチュクチ”のレフジーは、1950年代まで群とともにさまよっていたといわれる（Forsyth 1992: 340）。

その一方で、現在のチャウン地区の中心地ベヴェックでは、1929年からロシア人が住むようになったといわれる（池谷, 2002）。その後、1932年には、文化基地（クリトバーザ）としてベヴェックに集合住宅が建設された⁴。これらベヴェックでの最初のロシア人とレトクーチ村のロシア人との関係は明らかではないが、村の博物館の資料によると、1930年ごろには村はなく、ロシア人の猟師のマルコフ氏兄弟が住んでいたという。なお、30年代のチャウンチュクチは、1年間に1家族当たり50頭のトナカイを肉や毛皮用に処理していたといわれる（Krupnik 1993: 109）。

マルコフ氏兄弟は1920年代の終わりに来たというが、どこからきたのかは不明である。1931～32年に、ロシア科学アカデミーの鳥類研究所のあった所に村がつくられた。そして、1933～34年には村は現在の場所に移った。そこには学校、学生寮、パン工場が建設された。

1939年にはこの地域の人口センサスがつくられた。1940年に最初のコルホーズがつくられ、マルコフ氏がその責任者となった。1941年にモスクワから学校の先生が来た。文化局や診療所もできた。1957年にはソフホーズが結成された。1959年の人口は約80人を数えたが、ロシア人が大部分を占め、チュクチは多くなかった。（池谷 1999b）

さて、地域集団レヴェルでの交易の実態を把握するためには、交易の担い手である地域集団を復元することが不可欠である。図3は、レトクーチ村で無作為に選んだ6人の古老（男性1名、女性5名）からの聞き取り調査によって作成された。古老は、エットウーエやティグルカイやエネネウルグンのような、かつてのトナカイ大規模所有者の妻や子供から構成される（図3）。その結果、大規模トナカイ所有者にはいずれも2～3人の妻がいたことがわかる。その一方で、5人の古老たちは共通して、ロシア語（ロシア語をまったく話

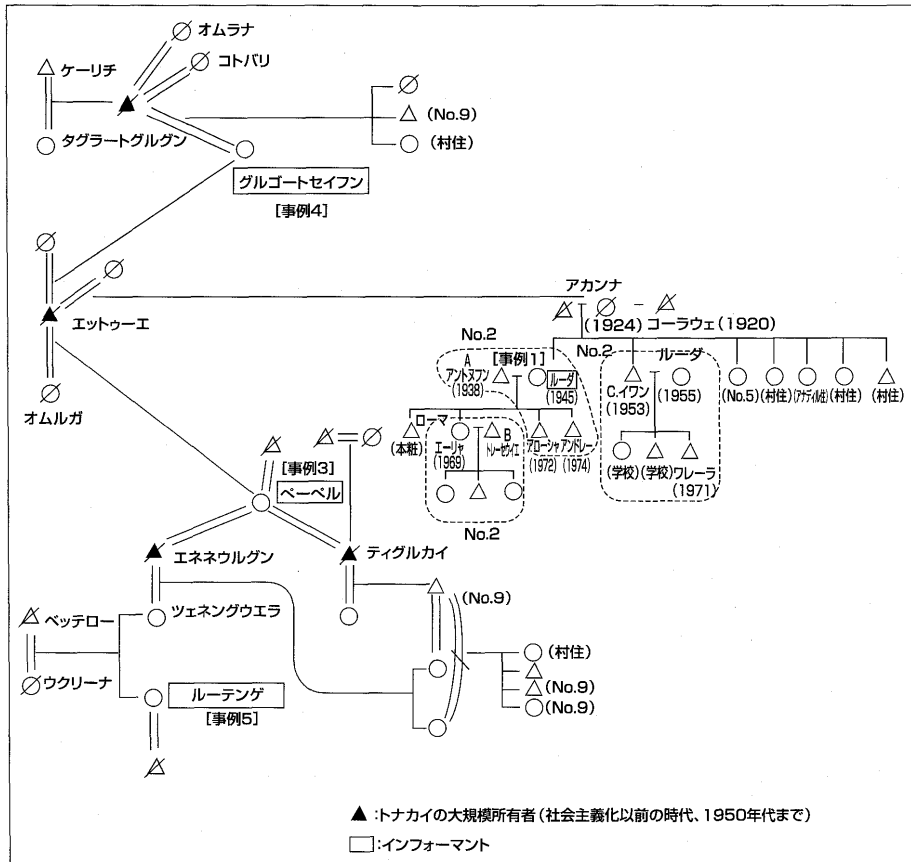


図3 チャウンチュクチの家系図

せない人もいる)よりはチュクチ語を流暢に話すことから、自らをチュクチとみなすアイデンティティーの強さが見受けられる。

4.2 20世紀前半におけるアメリカ人とチュクチとの交易の実態

本節では、20世紀前半におけるチュクチの交易の実態と、それによってチュクチ社会がいかなる変化をしたのかを把握する。

まず、ボゴラスが、“トナカイチュクチ”の生活にはあまり地域的差異がみられないと指摘するので、“トナカイチュクチ”の平均的な生活を簡単に紹介する。彼らのキャンプ群は、普通川沿いに位置する。また、放牧地が水系によって分割されていて、春のキャンプは虫から逃れるためにツンドラへ、秋のキャンプは森林との境界につくられるのが普通である。こうしたチュクチの行動域は、100~150マイルの広がりを示す。そして、毎年、彼らはほぼ同じテリトリー内を移動する(Bogoras 1904-09: 25)。また、“海岸チュクチ”の多くは、数頭のトナカイを友だちの群の中においているといわれる。(Bogoras 1904-09: 20)

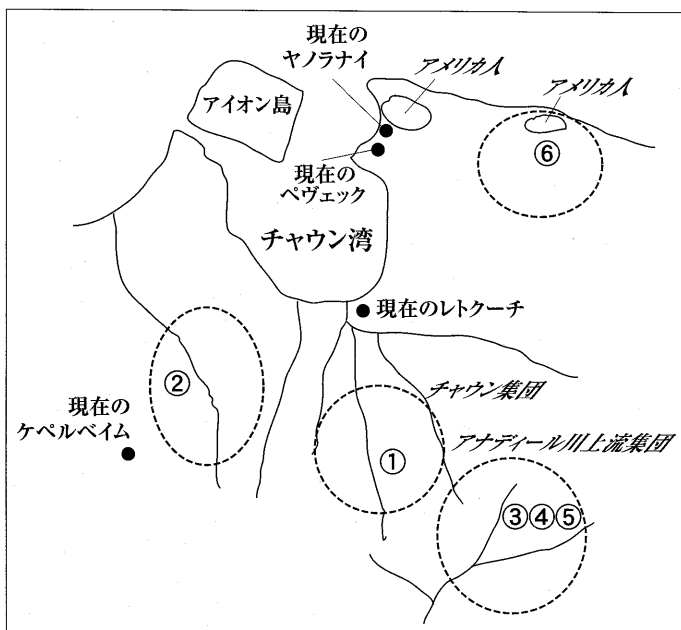


図4 事例1から6の情報に示される地域
①～⑥は本文中の事例番号に対応する。

以下、6人の古老からの聞き取り調査の結果から、チュクチとアメリカ人との交易の時代の社会生活を復元していく(図4)。なお、年代はほぼ1900年～45年を示しているが、古老の年齢を考慮すると1930年代や1940年代の出来事であるといえるかもしれない。

〔事例1〕ルーダ(1945年生、女性)

私の母は、ワン、ツー、スリー、石鹸、米、お金、タバコなどのアメリカ人の言葉(英語の単語)を知っていた。私の母が5歳の時に、ペヴェック(Pevék)の辺りの取引所(バザール)で、北極キツネやトナカイの毛皮との交換で、鉄鍋、斧、ヤカン(写真3)、お茶、キャンディー、タバコなどを入手したという。それは冬で、トナカイぞりに乗って移動して交換した。そこには毛皮交易のためにアメリカ人が住んでいたが、ロシア人はいなかったという。当時ペヴェックには家はまったくなく、チュクチが放牧地として利用していた。

当時すでに現在と変わらない夏营地と冬キャンプがあった。夏营地では、年寄り、子供、女性が残ったが、2人以上の妻がいたので牧夫の男性がたりないと一部の女性は男たちといっしょに放牧に出かけた。祖父は多数のトナカイを所有していたので、多くの人を雇っていた。

この事例1からは、ペヴェックの辺りでの“トナカイチュクチ”とアメリカ人との交易



写真3 アメリカ人から入手したヤカンの一部
ヤカンの上部は切られてすてられていたが、現代でも鍋として利用されている。

の一端がうかがえる。チュクチからは毛皮がもたらされ、アメリカ人からは鉄鍋やオノやヤカンなどが導入されている。また、チュクチのあいだに交易品を示す英語の単語が記憶されている点は興味深い。さらに、当時から使用されているという現地で観察したヤカンのそこには、COLONIAL TEA KETTLE SIDNEY の文字が刻まれている（写真3参照）。この鍋はオーストラリアのシドニーで生産されたものがアメリカ人の手に入り、アメリカ人を通してチュクチの社会に導入された。最近までそれは使われていたことから、彼らの社会にしっかりと根付いていたことがわかる。

〔事例2〕 レクリン・ボリス（1930年生、男性）

私は、パウンチュア川沿いのバラニハの辺りで生まれた。その後、パトゥ川の上流域に移動していた。ケベルベイムの近くへ行った際には、その林からそりや家用の細長い木をとったりもした。

私は子供だったので直接アメリカ人には会っていないが、ペヴェックの辺りに船で来たアメリカ人から交換で得たものを見ている。それにはタバコ（パイプ用）、四角で堅いお茶、ヤカン、鍋、銃などがあった。中でも銃は高価であったという。チュクチからはホッキョクキツネやおオカミ、トナカイの毛皮を持っていった。当時、ホッキョクキツネは木製の罠（写真4）で毛皮の質のよい冬にとられ、おオカミはホッキョクキツネと同様な罠でおとすか、アメリカ人から購入した銃でうち殺されていた。

当時、父親が所有するトナカイの数は少なく、トナカイ肉を食用にするだけではなく、コマイ（ハリウス）やサケなどの魚で補っていた。アイオンのチュクチはアザラシやセイウチなどを捕獲していたので、アザラシについてはアイオンを訪れる人に頼んで、トナカイ肉との交換で入手していた。私たちはアザラシの油をトナカイの干し肉や冷凍肉につけ

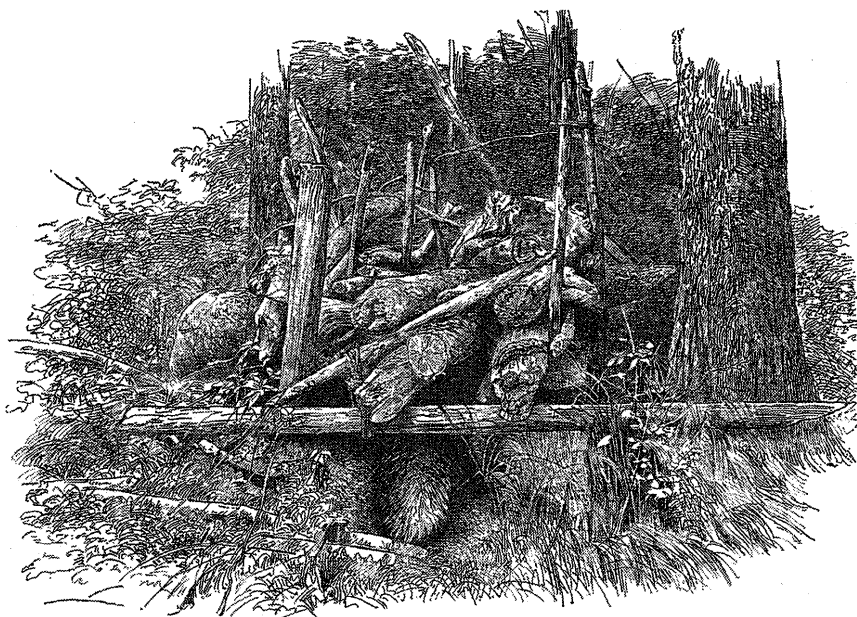


写真4 キツネを捕獲するための押しつぶし罠 (Bogoras 1904-09)

て食べていた。アザラシの皮は夏用のブーツの材料にするのによかった。また、セイウチのキバはそりを引くトナカイのムチの先に、皮は夏や冬用のブーツの底に使われた。当時のトナカイには耳印が刻まれていて、その所有者が人目でわかるようになっていた。耳印はトナカイが2歳になった春につけられたものだ。

この事例2からは、トナカイの所有頭数の少ないチュクチの場合におけるアメリカ人との交易がうかがえる。この場合、アメリカ人からもたらされた銃が、チュクチの狩猟法を大きく変えていることがわかる。また、ホッキョクキツネの毛皮を人が獲得する際には、罠が使われている。

〔事例3〕 ペーベル (1908生, 女性)

私は、アナディール川沿いのマルコバで生まれた。父の名はエトゥーエで、母の名はオムルガである。父は多くのトナカイ群を所有して (のちに第1生産大隊)、ツンドラを移動し、ベヴェック周辺で物々交換をしていた。私は夏には牧夫といっしょに移動生活を送っていたが、結婚して出産してからは本拠地 (夏営地) に残るようになった。

祖父がどこから来たのかは不明であるが、彼はマルコバの方からチャウンの方に移動してきたという。彼の所有するトナカイ頭数は不明であるが、トナカイを3つの群に分けて飼養していて、雇われ牧夫も多かったという。

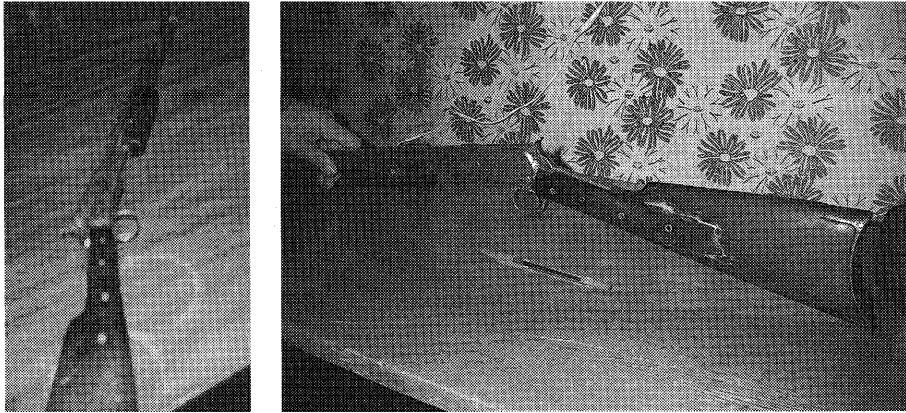


写真5 アメリカ人から入手されたヴィンチェスター銃

私はアメリカ人を見たことはないが、アメリカ人のも持ってきた物を見たことがある。固いタバコ、固くて黒いお茶、スコップ、ヴィンチェスター銃（この銃は父と夫の2人がそれぞれ所有する）（写真5）などである。また、アメリカ人は犬ぞりを使ってやって来て、キツネや仔トナカイの皮を購入していたという。

最初の夫の名前は、エネネウルゲンである。彼はトナカイを持っていたが、レトゥエムで死亡する。2番目の夫の名前はアイゲントである。3番目の夫の名前はティグルカイである。彼は地域の統率者（オーソース）であったが、1983年に死亡する。

この事例3のインフォーマントは、雇用牧夫のいるような大規模所有者の娘である。また、アメリカ人との交易はベヴェック周辺のみならずツンドラでも見られたことがわかる。なお、銃には、Made in U.S.A. Winchester Repeating Arms Co. New HAVEN と書かれている。ここから、アメリカで製造されたものであることがわかる。

〔事例4〕 グルゴートセイフン（年齢不詳、女性）⁹⁾

現在の第9生産大隊の辺りで生まれる。父が生きている時に、アナディール川の上流にて、2人のアメリカ人の男性を見た。彼らは犬ぞりに乗って、タバコや堅いお茶、及び鍋やヴィンチェスター銃などと北極キツネの毛皮とを交換していた。父は多数のトナカイを所有していたが、父の死亡後にこれらのトナカイはアナディール地区のソフホーズに手渡された。

この事例4からも、当時、大規模なトナカイ所有者がいたこと、チュクチとアメリカ人との交易がみられたことがうかがえる。

〔事例5〕ルーテンゲ（1910生，女性）

現在の第2生産大隊の地域で生まれた。ティグルカイは私のいとこである。彼の妻は3人いた。彼の所には多くの雇われ牧夫がいた。もともとはレスノエ（現在の第5生産大隊の地域）にいたが、降雪の後に地表が凍ったためにトナカイが採食できなくなって、カラナバ（現在の第9生産大隊の地域）へ移動した。

オムルールグンは、プチェ川（第1生産大隊）にいた。タグラードグルグンは、レスノエにいたが、エトゥウェール川に移動した。これら3人とも多数のトナカイを所有していた。彼らは父親が多くのトナカイを所有していて相続したのである。

私の夫は、トナカイの頭数は多くないが所有はしていた。いくつかの家族のものを集めてトナカイ群ができて、トナカイの耳印によってお互いの所有が区別された。ちなみに、その耳印（家族の耳印を孫が書いてくれる）は、父から子へ継承されている。

この頃、秋にチャウンのペリワードの近くで犬ぞりを見たことがある。彼らはビーリンスキーの方から来ていて、アザラシの皮や油を持ってきて、トナカイの肉と交換した。言葉は通じた。彼らが「ププププ」と言って、犬に近づくのが印象に残っている。彼らはここよりもっと奥の村にポールをもらいに行っていた。

この事例5から、チュクチのなかでトナカイの所有頭数に大きな差があり、大規模所有者は雇用牧夫を使う一方で、小規模所有者は数世帯が集まって飼養をしていたのがわかる。また、トナカイの所有者を示す耳印が機能していた。さらに、“トナカイチュクチ”と“海岸チュクチ”との交易が確認できた。

〔事例6〕アーニャ（年齢不詳，女性）

8～10人のアメリカ人が、船で来ていた。そこには海で狩りをする人のヤランガ（伝統的な家屋）があったが、多くの人がツンドラからも集まって来ていた。また、そこには、グレゴールという名のチュクチではない男性が住み、チュクチとアメリカ人との交易の仲介をしていた。つまり、アメリカ人が彼に物を預けて、チュクチの人がその物を持っていった。アメリカ人はトナカイの皮ばかり取っていったのをよく覚えている。ツンドラからの人は北極キツネの毛皮を持ってきていた。

私は父と母が殺されたので、おじさん（母の兄弟）の所で育った。1936年生まれの子がいうには、祖父はビーリングスの海岸に住み、アザラシやセイウチ狩りで暮らしていた。そして、トナカイとホッキョクキツネの毛皮をアメリカ人に渡す代わりに、鉄鍋、タバコ、お茶、バター入りの缶、ヴァインチェスター銃、鉄製の罌、スコップなどを入手していた。小学校に入学する頃にはアメリカ人はいなかった。その前には、秋にアメリカ人を見ている。

この事例6からは、“海岸チュクチ”もアメリカ人と交易をしていたことがわかる。また、両者の交易の仲介には別の集団の人が介入している点は興味深い。アメリカ人から獲得した物は他の事例と類似している。さらに、交易の行われた海岸部には“トナカイチュクチ”も集まって来ていたことから、交易品をめぐって、アメリカ人、“海岸チュクチ”、“トナカイチュクチ”のエスノネットワークが形成されていた可能性がみられる。

以上の6つの事例から、当時のチュクチには大規模トナカイ所有者から小規模所有者まで彼らの経済生活に階層化が見られていたが、いずれの階層においてもアメリカ人との交易活動が組み込まれていたことが明らかになった。また、彼らが交易により得た銃や鍋や斧などはその社会を変容させてきた。さらに、彼らが多数のトナカイを所有したことは、銃によるトナカイの害獣となるオオカミの減少やトナカイ皮が商品化されたことなどが関与している可能性がある。

5 考察—20世紀前半におけるチュコトカ・カムチャッカ地域の先住民と毛皮交易

この報告では、“トナカイチュクチ”の生活に焦点を置き、20世紀前半におけるチュクチの交易の実態と、それによってチュクチ社会がいかなる変化をしたのかを把握することを目的とした。その結果、以下のようなことが明らかになった。

帝政ロシア時代におけるチュクチの12の地域集団の特徴をみると、“トナカイチュクチ”の中に、キャンプ成員の規模の大小やトナカイ飼養頭数の大小などから明確な地域性が存在することがうかがえる。なかでも、チュコトカ半島ではトナカイ牧畜と海獣狩猟とを組み合わせている点が特徴的になっている。また、この時代を通して、“トナカイチュクチ”であれ“海岸チュクチ”であれ、チュクチの経済活動のなかで交易活動が重要な所もあったことがわかる。

ソヴィエト社会主義時代において、チュクチへの集団化政策の施行は遅れた。当時の“トナカイチュクチ”では、世帯別のトナカイの所有頭数に大きな違いがあったが、いずれの層においても、1930年代～1940年代には、アメリカ人と“トナカイチュクチ”との交易が普通にみられた⁹⁾。アメリカ側からは、銃、ヤカン、鍋、斧、ピーズなどが、チュクチ側からはホッキョクキツネ、オオカミ、トナカイの毛皮が供出されていた。また、当時の交易活動はチュクチの社会生活に影響を及ぼし、彼らが交易により得た銃や鍋や斧などが彼らの社会を変容させてきた。さらに、多数のトナカイを所有していた階層では雇用牧夫をもち、銃の利用によってトナカイの害獣となるオオカミが減少したこと、トナカイの皮が商品化されたことで彼らの商業牧畜をいっそう進めることができたと考えられる。

その一方で、カムチャッカ半島のエツソ村では、次のような交易の実態が報告されている。社会主義革命が起こりソ連が成立する以前には、カムチャッカ半島にアメリカ人がや

ってきて交易をしていた。西海岸のエヴェンの村やイテルメンの村で、先住民の人たちはアメリカ人や日本人と交易をした。アメリカ人はビーズ、鉄製器具、ヴァインチェスター銃、オノを持ってきて、テンや犬の毛皮を交易していた。また、海岸部には日本人の村があり、漁業に従事していた。エヴェンは毛皮を持っていき、日本人の持っていた食料、ウオッカや酒と交換したという（岸上 1997）。

このような事例と本稿で明らかにされたチュクチの毛皮交易の実態とを比較してみると、カムチャッカのエヴェンとチュコトカの“トナカイチュクチ”では交易に関する類似の現象が起きていることが指摘できる。しかし、資料の制約によって比較できない点もみられる。交易の仲介者が存在していたのか否か、また、それが存在するとしたら、誰であったのかは不明である。また、チュコトカではテンや犬の皮が交易品として使われることはなかったなど、両者の交易品の違いも指摘できる。

以上のようなチュクチの毛皮交易の研究では、今後現地においてより多くの詳細な事例を収集すると同時に、より大きな地域のなかでチュクチの関わる交易の意味を考察することが不可欠であると思われる。このため筆者は、20世紀前半におけるチュコトカのみではなくカムチャッカにも視野を広げて、民族間関係の社会経済的動態を明らかにすることを今後の課題として考えている。このなかでは当時の政治経済的背景を共通にしながら、「アメリカ人とチュクチやエヴェン」、「日本人とエヴェンやイテルメン」という2つの民族間関係を想定して当時の社会を考察することができる。その際には、前者の交易品としては毛皮が重要な位置を占めるが、後者では漁業労働形態に先住民が雇用される場合（渡部 2001）や、物々交換のような関係を結んでいる場合など多様な関係が見られている。これらの地域の交易を通して民族間関係の全体像を把握する研究は、今後の課題として残されている。

註

- 1) ロシア極東沿海地方に暮らす狩猟採集民ウデへの中華世界のなかでの位置づけに関しては、（佐々木 1997）の論文を参照されたい。
- 2) “トナカイチュクチ”は、トナカイを多頭飼育するトナカイ遊牧民であるというステレオタイプのイメージが一般的である。しかし、本稿の事例にみられるように、トナカイの所有頭数には家族による差があり、多くのトナカイを所有していない家族では、漁撈に力をいれていることが指摘されている。筆者は、イランのバルーチ遊牧民（Salzman 1972）のようにマルチプルな資源利用をする遊牧民であると彼らをとらえたほうがよいと考えている。
- 3) 1788年のアヌイ交易所での交易は、儀礼的な交易と実質的な交易に分かれていたという。前者の場合には、ロシアの役人とチュクチのリーダーとの間で贈り物の交換がおこなわれていた。（Znamenski 1999; 岸上 2001: 309）ここで、このチュクチのリーダーがどこの集団のチュクチであったのかを認定することが重要な課題になるであろう。その当時、アヌイやチャウンにはチュクチが暮らしていなかったことから、筆者はチュコトカ東部からやってきた人々であると推

- 察している。
- 4) 1924年に極北諸民族に対する援助の中央機関として、全露中央執行委員会に付属する北部辺境諸民族援助委員会(略して、北方委員会)が設置された。そこでは、ボゴラスやシュテルンベルクが指導的な役割をはたしたといわれる。文化基地は北方委員会がシベリアのもっとも僻遠の地に僻地住民への経済的、文化的サービスの施設として1927年から1935年にかけて組織したものである(飯田 1989: 163)。
 - 5) 夫の名前はタグラートグルグンである(図3)。彼はアナディール川の上流域に暮らしていた。
 - 6) チュコトカ自治管区イウルティン地区の北部においても、戦前にアメリカ人とチュクチとの交易がおこなわれていたという(Virginie Vat'e. 私信)。その詳細は不明である。

文 献

- Artiunov, S.
 1988 *Chukchi: Warriors and Traders of Chukotka*. In W. W. Fitzhugh and A. Crowell (eds.) *Crossroad of Continents: Culture of Siberia and Alaska*, pp.39-42. Washington D.C.: Smithsonian Institution Press.
- Bogoras, W.
 1901 *The Chukuchi of North-Eastern Asia*. *American Anthropologist* 3, 80-108.
 1904-09 *The Chukchee*. *Memories of the American Museum of Natural History XI and The Jesup North Pacific Expedition 7*. New York: G. E. Stechert and Leiden: Brill.
- Burch, E. S.
 1988 *War and Trade*. In W. W. Fitzhugh and A. Crowell (eds.) *Crossroad of Continents: Culture of Siberia and Alaska*, pp.227-240. Washington D.C.: Smithsonian Institution Press.
- Forsyth, J.
 1992 *A History of the Peoples of Siberia: Russia's north Asian Colony 1581-1990*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 飯田規和
 1989 「極北の少数民族」NHK 取材班他『北極圏3』pp.161-165, 東京: 日本放送出版協会。
- 池谷和信
 1993 「シベリア牧畜民研究」『北方学会報』2, 12-13。
 1997 「イギリス植民地ベチユアナランドにおける毛皮をめぐるエスノネットワーク」『社会人類学年報』23, 29-53。
 1999a 「狩猟民と毛皮交易—世界経済システムの周辺からの視点」『民族学研究』64(2), 199-222。
 1999b 「シベリア北東部におけるチュクチのトナカイ牧畜と放牧テリトリー」『北海道立北方民族学博物館研究紀要』8, 1-30。
 2002 「シベリア北東部におけるチュクチの文化変容—チャウンスキー地区の事例から」煎本孝(編)『東北アジアの文化変動』pp.283-317, 札幌: 北海道大学図書刊行会。
- Ikeya, K.
 2001 *Chukchi Reindeer Grazing and Changes to Grazing Territory in Northeastern Siberia*. In D. Anderson and K. Ikeya (eds.) *Parks, Property, and Power: Managing Hunting*

Practice and Identity within State Policy Regimes (Senri Ethnological Studies 59), pp.81-100. Osaka: National Museum of Ethnology.

岸上伸啓

1997 「ロシア極東カムチャッカ半島のコリヤークとエヴェン—1996年エッソ調査報告」『人文論究』64, 47-87。

2001 「北米北方地域における先住民による諸資源の交易について—毛皮交易とその諸影響を中心に」『国立民族学博物館研究報告』25(3), 293-354。

Krupnik, I

1993 *Arctic Adaptation: Native Whalers and Reindeer Herders of Northern Eurasia*. Translated by Marcia Levenson, Hanover and London: University Press of New England.

Levin and Potapova (eds.)

1964 *The Peoples of Siberia*. Chicago: The University of Chicago Press.

Nordenskiöld A. E.

1881a *The Voyage of the Vega round Asia and Europe* 1. London: Macmillan and Co.

1881b *The Voyage of the Vega round Asia and Europe* 2. London: Macmillan and Co.

Oakes, J. and R. Riewe

1998 *Spirit of Siberia: Traditional Native Life, Clothing, and Footwear*. Washington D.C.: Smithsonian Institution Press.

Salzman, P. C.

1972 Multi-Resource Nomadism in Iranian Baluchistan. In N. Dyson-Hudson and W. Irons (eds.) *Perspective on Nomadism*. Leiden: Brill.

佐々木史郎

1997 「広域経済システムとウデへの狩猟」『社会人類学年報』23, 1-28。

Schweitzer, P. P.

1999 The Chukchi and Siberian Yupik of the Chukchi Peninsula, Russia. In R. Lee and R. Daly (eds.) *The Cambridge Encyclopedia of Hunters and Gatherers*, pp.137-141. Cambridge: Cambridge University Press.

Schweitzer, P. and Golovko E.

1995 *Contacts across Bering Strait: 1898-1948*. Report Prepared for the U.S. National Park Service. n.d.: Alaska Regional Office.

Vdovin, I. S.

1964 Trade Relationship between the Peoples of Northeastern Siberian and Alaska Prior to the 20th Century. *Letopis' Severa* 4, 117-127.

1965 *Очерки истории и этнографии чукчей*. Москва: Издательство «Наука».

渡部 裕

2001 「カムチャッカ先住民の文化接触—北洋漁業と先住民の関係」『北海道立北方民族学博物館研究紀要』10, 17-46。

Znamenski, A. A.

1999 Vague Sense of Belonging to the Russian Empire: The Reindeer Chukchi's Status in Nineteenth Century Northeastern Siberia. *Arctic Anthropology* 36(1-2), 19-36.

